HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 経済理論とパラダイムの階層転移 |
| Author(s) | 長尾, 昭哉 |
| Citation | 北海道大學　經濟學研究, 29(1), 25-36 |
| Issue Date | 1979-03 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/31441 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 29(1)_P25-36.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 経済理論とパラダイムの階層転移

長尾昭哉

## はじめに

経済理論は，たとえ抽象的に書かれている場合にせよ，実際にはつねに或るパラダイムによって具体的に意味づけられている。理論というものを，ひとつの言語的コンストラクションと考えれば，或るコンストラクションがいくつかの異った仕方で意味づけられることもあるわけである。ウィトゲンシュタインがいうように，言語の意味はその使用にあるからである。彼はまた，その使用を定めるのは，「言語ゲーム」の種類であるともいう。

本稿では，競争均衡の抽象理論に，今まで意味をあたえてきた「言語ゲーム」について考えると同時に，その意味を全く新たなものにするような，別種のゲームについても考えて見たいのである。

## 1　力学的パラダイム

### quest for certitude

> 純粋経済学が，力学と同じようにひとつの物理的科学であるなら，数学的方法や数学的言語を用いるのに何のはばかりがあろう。
>
> レオン　ワルラス[1)]

アリストテレスの自然学における「自然というもの」と，ガリレイが「数学のことば」で読み解こうとした「自然というもの」は何と大きくへだたっていることであろう。またこの例ほど極端ではないにせよ，スミスの経済学における「経済秩序」から見れば，ヒックスが「価値と資本」で画いて見せる「経済秩序」はよほどずれているし，ドブリューの「価値の理論」にかく

されている経済世界のイメージは更にそのどちらとも別のものである。

経済学者を含めて，一般に科学者というものはトマス・クーンのいう「パズル解き」のこまかい仕事をしているのである。パズルにはつねにルールがあるわけだが，そのルールをあたえるのは，またパズルそのものを限りなく生成するのは，クーンのいう「パラダイム」であって，黒崎宏氏の表現によると，それは「法則，理論，概念，応用，装置，形而上学的立場，心がけ，などを含む具体的な科学的業績で，以後の研究のモデルになるようなもの」[2]である。アリストテレスの有名な書物やガリレイの業績はまさにそういうものであろうし，経済学者の幾百幾千のパズル解きが繁栄しているのは上述のヒックスのテキストに culminate したいわゆる「新古典派体系」というパラダイムの上においてであるといってよい。

経済学におけるパラダイムの転換をめぐる玉野井芳郎氏の示唆的な諸論文は幸い一冊の書物にまとめられた[3]。そのうちの「科学の階層構造と経済理論」には，低次のレベルから高次のレベルへと階層的に理論的システムを配列し，これとの相関において経済理論のパラダイムの進展を方向づける試みが提示されている。私の理解が正しければそのあらすじはこうである。

原子，分子，ビールス，遺伝子，生体組織，社会組織，などはそれぞれをシステムと見ることが出来，またそれらはその complexity の点で，低次なものから高次なものへと大体この順序で或る種の階層的構造をなしている。またこうした対象的世界の階層構造に対応して，理論的システムの階層的配列を考えることが出来る。

例えば，ボウルディングが時計仕掛けのレベルと呼んでいる deterministic な――あるいは stochastic でもよいが――プロセスのモデルがある。次に情報の伝達と処理を含むサイバネティカル・レベルのシステムが来る。より高次のレベルとして生命有機体のモデルを考え，言語によるコミュニケーションをもつ社会組織のレベルを定位することもあるいは可能であろう。私はさしあたり，力学，制御工学，および対話状況という三つのレベルを区別して，経済理論の意味を考えて見たい。

さて，これから伝統的経済理論あるいは単に経済理論というとき，いわゆる新古典派理論のコアをなしている一般均衡理論をさすことにする。ごく大体のところをいえば，次のようなものである。消費集合と選好によって特徴づけられる若干名の消費者と，生産集合によって特徴づけられる若干名の生産者と，ある大きさの資源からなる経済があるとする。そこに価格体系があたえられると，各主体は「極値原理」によってそれぞれ特定の行動を選択する。このようにして定まる経済状態を，資源と整合的ならしめる価格体系があるかどうかという問に，いくつかの条件を明らかにして肯定的に答えるのが，この理論の主内容である。こうした経済状態の集合を均衡というわけであるが，均衡が達成されるプロセスとしてワルラスが模索と呼んだものか，またはそれに相当するメカニズムが加えられる。更にこのような均衡が達成可能な経済状態のうち最適なものであることと，逆に達成可能な経済状態がここにいう最適であれば，それを均衡とするような価格体系があるという議論がもう一つ加えられる。

こうした新古典派理論は，ながい間ジェボンズのいう**効用と私利の力学**であった。要するにこうした理論構成は，文字通りの——アナロジカルな——意味での何か或る具体的なモデルを思い浮べるという仕方で意味づけられるのが普通である。そのアナロジーが結局のところすべて擬似力学的なそれであったことは今更述べるまでもないであろう。「経済学者のメッカは経済生物学にある」といったマーシャルでさえ，実際には生物学的概念は複雑すぎるとして力学的アナロジーを重視し，振子の比喩を考えた。とはいっても，物理の世界に何か経済モデルの厳密に正確な対応物があるなどということではない。熱力学と統計力学のモデルを利用して，ワルラスやパレートの理論を再構成しようとしたジャック・デュモンティエなどは例外中の例外である。[4] 問題は競争均衡の理論が，擬似力学的レベルのパラダイムにおいて意味づけられたということにある。

それでは何故そうなったのか。その理由はあらためて問うまでもない。**近代科学が素朴な実在論や単純な経験主義と全く混交していた**時代の空気の中

で経済学が生れ育ったからである。よく知られているように，デカルトはこころとか意識をres cogitansとし，他方では石ころやねずみをres extensa——ひろがりを持つもの——として，二つの世界をはっきり区別した。いわゆる主観性と客観性の dichotomy は，カントによって哲学的反省の主題とされ，revolution copernicienne とよくいわれるその大きな転回は，フッサールをへてメルロー＝ポンティによっていわば実を結ぶことになるのだが，経済学はこうした反省が始っている同じ時代に，別のところで仕事をして来たのである。

ひろがりを持った**もの**の世界こそ客観的な実在であり，certainなものはそこにあるといった思考様式は，後になって，人間さえも black box にしてしまって，ねずみを観察するのと同じ仕方で因果図式のうちにとらえようというワトソンの行動主義さえ生み出す。科学という名の知のいとなみが，certitudeの追究であるという，それ自体としては正しい意識は，たてまえとしての客観主義——実際には観念論的な形而上学の一変種——にみちびく。

先に述べたようにパラダイムというのは一定の形而上学——あるいは暗黙の形而上学——を含んでいる。力学的パラダイムは素朴な客観主義という形而上学的立場と不可分なのである。新古典派のめざましい成果は，客観主義の形而上学が今までの所成功であった——この立場を含むパラダイムが研究努力を比較的正しくガイドしてきた——ということを意味する。いいかえれば理論的研究の成果が，**ホモ・エコノミクスの世界という扱いやすい半現実** demi-realité の対象的定立に負う所は大きいのである。

しかしながら，あまり変りばえのしない，既に成果が出つくしているともいえる主題をめぐって，パズル解きの exercise が氾濫する傾向が次第にあらわれて来るとすれば，古いパラダイムが危機の symptom を示しているのかもしれない。ドミ・レアリテはレアリテではないということを忘れて，前者のモデルと後者のデータを，論理的誘導の困難さを思いわずらうこともなく結びつけるたぐいの実証研究については，なおのことである。

## 2　工学的パラダイム

### visibility as controllability

> ここでは，「原因と結果の直線的関係」が「理由と帰結の循環的関係」に，すなわち原理的には受け入れることも拒否することもできる外的影響力の循環的関係に転化されるのである。これはあるいは，人間の自発性の産物を取扱う科学が，非決定性という形で支払うべき高い代価なのかもしれない。だが，権謀術数の専門家もしくは不治の「科学主義」中毒患者以外の誰が別の代価を支払うというのだろうか。
>
> アドルフ・ロウ[5]

時計仕掛けのパラダイムの素朴な客観主義からの批判的離脱のきざしは，実証主義的意識と共に始まる。客観主義への批判が，より一層客観的であろうとする努力から始まるというのは奇妙に聞えるかもしれない。しかし，実際のところ，実証主義とは，「理論は経験からの抽象である。」とするより皮相な客観主義と，「理論は経験によって検証さるべきである」という反省との混合物である。

伝統理論を構成する基本命題を経験的に検証しようとするこころみから，二つの結果が生じた。一つは検証可能性と両立する reformulation をめざす努力が，一般的に理論を，**一層操作的な言語に transcribe する傾向**を強めたこと，もう一つは，理論命題の検証の難しさが明かにされ，そのことが実証主義的意識そのものの反省に導いたことである。

古典経済学のグランド・セオリーは，いわばすべての変数を内生化した完全な説明体系であった。つまり，そこでは，原因としての主体の行動も，それが結果としてもたらすものと確信された経済状態も，完全に自明なものであったわけである。生産者が利潤を最大にしようとし，消費者が満足を最大にしようとするのは，スミスのいうように「生れてから死ぬまで，人間に本来そなわっている」普遍的な性向からにすぎない。これらの命題が，社会的経済的発展の壮大な動学体系の基礎であった。またこうした動学モデルが当

時の歴史的パースペクティブと大体において合致していた限り，体系の出発点をことさら疑問視する必要はなかったというべきであろう。そして古典派の議論に含まれていた fundamental postulate から極値をみつける論理的プロセスを引出し，いくらか洗練されたかたちになおしたのが新古典派の marginal principles に他ならない。

ところが今や，この marginalism が「経験からの抽象である」ということになれば，観察可能なデータによって直接にか，または間接にかそれをテストせねばならない。疑う余地のない真実と単に宣言されていたことが，それ自身 verify されるべき仮設の地位に置かれることになる。では若し marginal principles からの deviation がしばしば観測されたら，仮設は discard されるべきであろうか。或いはまた，こうした deviation をひき起した経済的・非経済的誘因をあらたに考慮にいれて，一層包括的な実証モデルを建設するように心がけるべきであろうか。もちろん，主体に関する marginalism それ自身は仮設的構成であって，直接 verify する必要はないとすることも出来る。その場合は結果つまり均衡という経済状態を検出すればよい。しかし，マーシャルが既に注意しているように，均衡とは「生活の一般的条件が十分長い間不変で，経済的諸力が完全にその効果を発揮することが可能であるような場合に，その経済的諸力がもたらすであろう状態」なのである。[6] 事実上，システム自体の均衡へ向う動きは，システム外の攪乱的影響がない場合にのみ観察される。つまり，全く例外的な状況においてのみ，事実として観察されるというわけである。

理論パートに攪乱項を加えた行動方程式システムというかたちにあらわされた仮説を統計的手続きを通じて検定しようとするエコノメトリクスの分野がひらかれたのはたしかである。しかし，――経済モデルに特徴的な構造を考慮したパラメーター推定手続に関して substantial な成果がもたらされたことはまぎれもない事実であるが――経済理論のコアから testable zone を論理的に展開するというもともとのねらいが実現されたのかどうかは，少くとも疑問である。

一方，自然科学を念頭において，科学的言明をそうでないものから区別しようとする方法論的研究から，或る思想的な発展が起る。それは，後向きの実証主義から前向きの実証主義への転回といってもよいような重大な出来事である。というのは，帰納論理学の建設は——伝統的な経験主義を確立するにはそれが必要であるのに——結局のところ成功しなかったし，そうなると演繹論理しか頼るものはなく，従ってたかだか仮設の反証だけが可能だからである。黒崎宏氏は次のようにまとめておられる。

「……現実に受け入れられている科学は，カルナップにおいては曲りなりにも経験によって確証せられているものであるのに対し，ポパーにおいては曲りなりにも経験による反証の試みに耐え，持ちこたえているものなのである。我々はここに鮮やかな視点の転換を見ることが出来よう。カルナップにおいては経験は科学を支える味方でありうるのに対し，ポパーにおいては経験は科学を倒そうとつけ狙う敵であるのである。おそらくカルナップは，西欧に連綿と続いていた経験主義の伝統，そしてそれに基づいての確実性の探究という事を，科学哲学の分野において忠実に守った最後の人ではなかったのか。これに対しポパーは，そのような経験主義の伝統から脱却し，科学を新しく見直した最初の人——科学哲学の分野においての最初の人——ではなかったのか。[7]」

ところで，新古典派の経済理論を，ポパーの反証可能性基準からすなおに見ると，ハチスンなどのいうように不合格という他はないようである。[8] また他方，マルハープなどが，この基準に合わせようとすると，伝統理論の大切な部分がそこなわれてしまうように感ずるのは，全く無理からぬことである。[9]

プロクルステスならぬ実証主義者のベッドから，経済理論を助け出すためには，前向きの方向にもう二三歩進んでみる他はないのではなかろうか。falsifiability を要求するのは，将来の経験に向って理論を open にしておく前向きの立場である。この立場を将来の経験を組織化するための制御という方向へほんの少し前進させれば，もはや工学的パラダイムの手前まで来ているともいえよう。

実際，計量モデルを多少とも使った経験のある人は，データの創出機構に重大な問題があることに気がつく筈である。もともと実証主義は理論を操作的な言語に書きなおすことだけでなく，実験・観察の手続を指示することを要求する。自然科学における実験装置に対応するのは，ここでは経済システムの制御装置である。要するに，このシステムは，意図的に操作しうる限りにおいてのみ，いいかえれば controllable である範囲においてのみ，visible であるといってよい。経済理論の crucial な部分は，かくして J. S. ミルのいう「予測には不十分」であるが，「誘導には非常な価値のある」知識のタイプに属するのではあるまいか。

サムエルソンの命名とされる「新古典派綜合」は既に rudimentary な制御系パラダイムを提示しているともいえる。彼が「財政金融政策を適当に補強する」ケインズ的間接統制の可能性を理解すれば，「古い古典派の原理からその関連性と妥当性の多くを奪ったパラドックスも，いまやその効力を失う。要するに，所得決定の近代分析をものにすれば，基礎的な古典派の価格づけ原理の正しさも，ほんものとして確認される……」[10]というとき，ロウのいう「手段探究的推論」への――因果的推論からの――方向転換がかすかに見えるからである。[11]

しかし，価格づけ原理の正しさを「ほんもの」にするために，ケインズ的制御をつけ加えるといった転換にくらべて，「いくたびか思いは浮べど，かくも巧みにあらわされたることなきもの」の新しい表現を求める努力は，一層深い意味でパラダイムの進展を予示している。

スミスやリカードの時代には，単に推測されていたに過ぎない競争均衡解の存在は，ワルトからアロウやドブリューの手をへて，周到に組立てられたモデルの上で証明される。スカーフらは，更に一歩を進めて，均衡点を有限なステップによって実際に attain する一般的な方法を明らかにする。Fixed Point Algorithm の研究は緒についたばかりで，どんな方向に進むか予想は未だできないが，ともかく成果が期待されている。何れにせよこの方向への理論の発展を力学的パラダイムにおいて意味づけるのは，制御と情報のパラ

ダイムにおいてそうするのにくらべてはるかに困難であろう。

## 3　対話状況のパラダイム

### regard survolant から parole parlante へ

> われわれとは，世界に対して開かれていることであり，世界への access なのである。そして，われわれが世界への近づきだからこそ，世界がわれわれに対して開かれてもいるのである。
>
> レミ・クワント[12)]

制御と情報のパラダイムを超える一層高次のパラダイムを模索するいとぐちは，主体の考察にあるように私には思われる。「見えざる手」のパラダイムは，あたかも自動人形のようにすべての意思決定を内生化された人間の住む閉じた宇宙であった。いまやこの宇宙は開かれ，外生的な意思決定の自由と，他方では同時に倫理的責任をもつ御制主体が登場する。例えば，上述したドブリューのモデルなどでは，システムの最適性としてパレートの意味のそれを採用しており，それ以外の基準をえらぶ理由は全くなかったのであるが，今度はシステムの制御目標として，別のものをえらんでもよい。しかし，そうなると誰がどんな資格でそのような決定をすることになるのであろうか。

新しいタイプの主体が登場することから生ずる問題は，ホモ・エコノミクスの宇宙にホモ・ポリティクスを加えるとか，ホモ・エコノミクス自身がホモ・ソシオロジクスなどの資格を兼ね具えるようにするといった仕方で片付けられるであろうか。私はたとえそのようにしても，**対象化されたシステムを考えている限り，かえって本質的には，拡張され複雑化された疑似力学パラダイムに回帰してしまう**と考える。

真の困難さは，このレベルでは主体としての主体――客観化された主体ではなく――が登場することにある。ここでは，事実と価値の二分法や主観性と客観性の二分法を，つまり先にふれた科学主義をのりこえることこそが問

題なのである。

科学主義とは，メルロー＝ポンティの考えによれば，「自分たちの研究の領野が客観的な実在であり，しかもこの実在が自分たちの眼前に横たわっており，客観的な眼ざしによって知覚されるものと」[13]考えることである。これは科学主義者が自らを主体とし位置づけている――正確にいえば，自らを位置づけることに失敗している――暗黙の哲学にほかならない。彼はこのように絶対化された主体を皮肉に，上空を飛行する眼ざし regard survolant と呼ぶ。

本当はむしろ，「主体とは，世界の企投にほかならない。われわれがそれであるあらゆることにおいて，われわれは世界に関わっている。われわれとは，多様な形での問いかけなのであるが，この問いかけのすべての側面は世界に関わりをもっている。メルロー＝ポンテイに言わせれば，世界は人間の主体性の核心に浸透しているのである。われわれがどんなに深く自分自身の内にわけ入っても，われわれはつねにそこに世界性を見出すのである。」[14]

開在，世界への近づき，問いかけ，としての主体は，客観的に対象化された主体でもなければ，絶対化された超越論的主観性でもない。このことをよく考えると，経済理論をたしかなものにするアルキメデスの点を求めようとして，実証主義のわなに落ちるのは，主体を上空に上げてしまうことによって Suchen der Gewissheit の方向を見失うからであることがわかる。

われわれが問題にしているシステムの分析者あるいは制御者と，システムのメンバーとを，観察者と観察対象といった主客関係において考えるのではなく，むしろ，両方とも間主体性のオルガンであり両義的なものであるとする方向にこそ，解決を求めるべきなのである。

とはいえ間主体性のレベル――そこでは語る主体が理論を animate する――にパラダイムを具体化するのは容易ならぬ仕事である。

ウィトゲンシュタインの残してくれた多くの教訓のうちでも特に深い意味をもつのは，彼が「論考」における自らの写像理論――言語は現実の写像である――を「言語ゲーム」――語の意味とはそれの言語の中での使用であ

る――によってのりこえたことであろう。実際ひとがことばの意味を理解するのは，一定の言語使用と行動様式と世界理解の統一であるところの或る Sprachspiel に参加すること以外の何ものでもない。

ある社会関係――例えば市場機構――における人間行動を，ある言語ゲームへの参加と考えるとすると，この参加とその理論化――市場機構の経済モデル――はここで一体どんなかかわりを持つのか。ゲームへの参加を何か客観的に説明するのではなく，日常われわれが慣れ親しみすぎているために，事態がよく見えなくなっているこの参加を他化 Verfremdung することによって，よく見えるようにするだけのことなのである。[15]

ハバーマスのいう discursive justification の考え方は，同様な意味でてがかりを供する。[16] 彼は ideal speech situation というモデルを考える。そこでは rational consensus に到達するという動機以外の一切の行動上の制約が suspend され，一切の validity claim つまり，ある事態が存在するかどうかの，またある行動の正当さについての判断がカッコに入れられる。これは対話状況の想定において，操作的に有効な仮説であり，すべての実際の合意をテストにかける批判的基準となる。

いま若し或る合意が真実の合意であるかどうかについて，更に論証せねばならないとすると，われわれは無限循環におちいり，それをさけようとすれば，外部に何らかの超越的権威を求めねばならなくなる。このディレンマから逃れるためには，よい論証であるかどうかについて，もっぱらその形式によって判別するみちしか残されていない。いいかえれば，そこに持ち寄られる argumentation がある形式的な要件を満たすことが，この理想化された discourse の収束をもたらすし，この収束を rational consensus として識別する保証を与えるのである。

われわれの term に移せば，ここには対話状況における一種の「均衡」が考えられているのであり，抽象的にいえば，均衡解へのアルゴリズムの収束を保証するようなシステムのデザインが問題になっているのである。その意味で，ほんらいは市場関係という特殊な歴史の産物から抽象された理論が，

その市場機構を包む一層高次の pure interaction のモデルに対して paradigmatic なはたらきを持つのではあるまいか。　　(1978年11月30日)

1) L. Walras, *Elêments d' Économie Politique Pure*, 1874～1877, L. G. D. J., Nouveau Tirage 1976, p. 71. にある一文の大意。
2) 黒崎　宏, 科学と人間　ウィトゲンシュタイン的アプローチ, 勁草書房, 1977, p. 174.
3) 玉野井芳郎, 転換する経済学, 科学の統合化を求めて, 東京大学出版会, 1975.
4) J. Dumontier, *Equilibre Physique, Equilibre Biologique, Equilibre Economique*, 1949.
5) アドルフ・ロウ著, 竹内靖雄訳, 経済学の認識, ダイヤモンド社, 1973, 175頁。
6) A. Marshall, *Principles of Economics*, 1890, macmillan, 8th Ed. Repr. 1977, p. 289.
7) 前掲書, 161頁。
8) 佐藤隆三, 論理実証主義と経済学の方法論, 玉野井芳郎他編, 近代経済学の系譜その史的再検討, 日本経済新聞社, 1976, 202～3頁。
9) T. W. ハチスンと F. マハループとの間のやりとりは佐藤隆三氏が同じ場所で紹介されている。こうした問題に関する経済学者の常識的見解はマハループの次の論文によく示されている。F. Machlup, Marginal Analysis and Empirical Research, in his *Essays in Economic Semantics*, New York Univ. Press, 1975.
10) サムエルソン著, 都留重人訳, 経済学, 第7版, 岩波書店, 1968, 558頁。
11) 前掲書, 152～161頁。
12) レミ C. クワント著, 滝浦静雄他訳, メルロー＝ポンテイの現象学的哲学, 国文社, 1976, 126頁。
13) 同書123頁。
14) 同書124～125頁。
15) 丸山高司, 理解と言語――精神科学における理解と言語の問題,「理想」6月号, 1978. さらに, P. ウィンチ著, 森川真規雄訳, 社会科学の理念　ウィトゲンシュタイン哲学と社会研究, 新曜社, 1977を見よ。
16) J. Habermas, Wahrheitstheorien, in *Wirklichkeit und Reflexion : Festschrift für Walter Schulz*, 1973, pp. 211～265.　J. Habermas, translated by T. McCarthy, *Legitimation Crisis*, Beacon Press, 1975, Translator's Introduction pp. x～xxiv に要約されている。